

---

# 『あんたが言うほど口クデナシ』【掌編】

山田文公社

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

## 【小説タイトル】

『あんたが言つほど口クデナシ』  
【掌編】

〔二二一〕

N  
3  
9  
2  
0  
P

【作者名】

山田文公社

【めぐらす】

日曜の朝だと言うのに目覚ましが鳴り響いていた。

昨日の酒が体中を巡る中、目覚ましを止めるつもりだったが、鳴っているのは目覚ましではなかつた。

田曜ぐらこは誰だつて、どんな状況であれゆつくり眠つていたいも  
のだ。

『あんたが言つまじロクナシ』 作・山田文公社

目覚ましがけたましく鳴り響く、日曜の休みだというのに切り忘れた目覚まし時計が馬鹿みたいに鳴り続けている。休みだと言うことで遅くまで映画を見ながらビールを飲んだせいで起きあがる事すらできない。耳障りな目覚ましは鳴り続けている。ベットから転げ落ちて鳴り続ける目覚ましへと向かう、こんな休みになぜここまでして俺は惨めにはいづつて目覚ましを止めようとしているのだろうか、疑問だけでとにかくこの騒音を止めてしまいたい。

目覚ましに手が届く、手にした目覚ましはとても静かだった。動いている気配すらない。だけどベルは鳴り続けている。頭がぼんやりしている中がこれが目覚ましで無いとゆっくりと理解した。チエストをはい上がるようにして立ち上がった。どうやら部屋の外から鳴り響いている。

「火事？」

自分の発した言葉で頭痛が増した。一日酔いは年を重ねる事に酷くなつていいくのを感じながらベランダへと向かいカーテンを開けると、窓一面が煙りが広がっていた。窓を開けると、どうやら階下から出火しているようだつた。あまりに煙たくて長時間は居られなかつた。すぐにベランダを閉めて部屋へと戻つた。黒い煙はベランダいっぱい広がつてゐる。

右に左にふらつきながら玄関へと向かつた。玄関を開けると一面が黒い煙で覆われていた。慌てて玄関を閉めた。少し心臓の鼓動が

早くなったのを感じながら、居間のテレビをつけると自分のマンションが映し出されていた。しかもかなりの勢いで階下が燃えている。

「冗談だろ…」

テレビに流れる映像はまるで悪い冗談のように、勢いよく燃える階下を映していた。このマンションは高層マンションで自分の部屋は割と高い位置にある、燃えている場所は下の方だが安心できる状況ではなかった。けれど、どうしてなぜだか逃げだそうという気分ではなかつた。できればもう一度ベットに戻つて眠つてしまつた。

どこかに置いている携帯が鳴つている。先ほどから鳴つているが場所がわからず放置している。ようやく探す気分になつたので、ふらふらとしながら探し始めた。ろくにメモリーも入つてない携帯は仕事と緊急連絡以外に使う事がないから、時折充電もしないで鞄や上着やジーンズのポケットに入れっぱなしで充電が切れている事がしばしばある。つまりは大して興味がないのだ。

記憶では上着に入れたはずだが、見あたらない。鞄の奥に入れてあるのを見つけると再び携帯がなりだした。

「はい井上」

「おい、いま映つてゐるお前のマンションだよな」

「ああ、そうだけど」

「え、いま外?」

「いや、部屋だけど」

「何してゐるんだよ、早く逃げないとやばいぞ」

「そうなのか?」

「落ち着きすぎだろ」

「慌てたって何も変わらないだろ?」

「とにかく警察でも何でも良いから連絡しろよ、死ぬぞ」

「ああ、わかつた」

「じゃあな」

そう言い友人からの電話は切れた。最後の『死ぬぞ』の言葉が妙に耳に残った。それはそれでいいのかも知れない。いつそその方が良いかもしね。そんな事を考えながら寝室へと歩く。

いつからこんな風になつたのだろうか、ガキの頃は野球選手になれると思っていた。けれど肩を壊して諦めた。諦めるのを同じように俺は自分の何かを色々を手放し、気が付けば少年院へと入れられていた。実の親父からは『ロクデナシ』と呼ばれた。親父は会社の部長で真面目な人間だった。だからこそ親父は俺を蔑んだ。おれは反発して家を出た。ベンチャー企業と名ばかりのブラック企業に就職し俺は他人を蹴り落とし、騙して奪つて成り上がつた。成功と言えば成功だったが、それだけだった。そんな中で親父が急死した。結局仲直りできずに親父は逝つた。俺は『ロクデナシ』のままだつた。

「たしかに“あんたが言つほどロクデナシ”だつたよ…俺は」

親父の写真が入つた写真立てを手にして呟いた。いつの間にか部屋には煙が入り込んでいた。写真立てをチェストの上に置いて、ベットへと入る。焦げ臭い匂いは布団を顔まで被つても匂つてきた。けれど、もうどうでもよかつた。頭痛が少しずつ和らいでいく、眠気が強くなつていいく。

「日曜なんだ、ゆっくり寝させてくれ…」

遠くなる意識のなか俺は呟いた。次の目覚めが来ない事を祈りながら、まぶたを閉じた…。

(後書き)

お読み頂もありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3920p/>

『あんたが言うほどロクデナシ』【掌編】

2010年12月9日06時50分発行